★人権作文の部 特選受賞者と作品

おもいやりってなんだろう 中央小学校 一年 近田 心輝

ぼくが五さいのとき、おかあさんのおなかには、あかちゃんがいきました。おなかが大きくなって、まいにち、たいへんそうでした。

あるひ、ぼくはおかあさんとふたりででんしゃにのりました。

でんしゃのなかには、たくさんのおひとがのっています。ぼくとおかあさんは、てすりにつかまってたっていました。でんしゃがガタンゴトンとゆれるので、ぼくはこけそうになって「こわいよ。」とおかあさんにいいました。すると、おかあさんがあいているせきをみつめて、ぼくをすわらせてくれました。ぼくは、せきにすわることができて、こわいおもいをしなくなったので、ほっとしたきもちになりました。でも、おかあさんは、大きなおなかをてでさえながら、がんばってたっていました。

ぼくは、そんなおかあさんを見て、おかあさんもでんしゃがゆれてこわいおもいをしているけれど、ぼくがもっとこわいおもいをしないように、せきをみつめてくれて、じぶんはがんばってくれているのだとおもいました。

ふとまわりをみると、おとなのおひとやぐせいのひとがほんをよんだりゲームをしたりしながら、せきにすわっています。そのせきには、「ゆうせんせき」とかいてありました。

そのひとたちは、ぼくやおかあさんがこまっていることにきがついていないようで、とてもざんねんきもちになりました。ぼくが、おかあさんにぼくのせきにすわってもらおうと、「おかあさん、おなかいたいでしょ？ここにすわってよ。」

という、よこにすわっていたおんなのおひとが、「きがつかなくてごめんね。どうぞ、すわってね。」

ぼくとおかあさんはそのひとに、「ありがとうございます。」といって、せきにすわりました。たいへんそうなおかあさんのおかあさんとしたかおになり、ぼくやせきをゆずってくれたおんなのおひとのかおもほっとしたかおになって、みんながしあわせなきもちになりました。とてもすばらしいなとおもいました。

ぼくは、ぼくとおかあさんがおんなのおひとにたすけてもらったように、みんなだれかとたすけあって、いきているのだとわかりました。これからは、みんながこまったり、たいへんなおもいをしていたら、じぶんからこえをかけたり、どうしたらたすけあえるかをかんがえたりして、みんながしあわせだなあと、おもえるようにしたいです。

わたしは、七月二十三日に、とうきょうオリンピックのかい会しきを見ました。たくさんの方がかい会しきを楽しんでいて、とてもかんどうしました。せん手入じょうのとき、わたしはいろいろな人がいることに気がつきました。はだが黒い人や白い人、うすいだいだいの人など、ちがいがあることです。ほかにも目の色のちがいやかみのけの色のちがいがありました。これからたくさんの方が金メダルをめざしてがんばるんだなと思いました。

つぎの日から、じゅうどうやたいそう、サッカー、たつきゅうなどいろいろなきょうぎを見ました。わたしは、日本をおうえんしていましたが、ほかの国のせん手がいっしょうけんめいがんばっているすがたを見て、どの国のせん手もおうえんするようになっていました。

しあいを見ていて、とても心にのこったことがあります。それは、たたかっているときはライバルなのに、しあいがおわると、かっただ人もまけた人もあい手のことを思っであく手をしたり、だきあったりしていたことです。そのすがたを見て、とてもかんどうしました。

見た目やことばにいろんなちがいがあっても人を思いやる気もちはこの国もおなじなんだなと思いました。

まだまだオリンピックはつづくけど、わたしはしあいだけでなく、しあい後のせん手のすがたにもちゅう目したいです。

そしてわたしも、せかい中の人たちとなかよくしてみたいと思いました。しょうらいは、いろいろな国の人たちと、友だちになりたいです。

わたしは、ヘアドネーションをしたことがあります。びょう気の人のために役立つことをしたいと思ったからです。ヘアドネーションのヘアは、「かみの毛」、ドネーションは「きふ」、つまりかみの毛のきふという意味です。がんや血えきのびょう気などが原因でかみの毛を失ってしまった人たちが使用する医りょう用かつらの材料として、切ったかみの毛をきふする活動です。

わたしは、ヘアドネーションという取組を知らなかったけど、お母さんに教えてもらってきょう味をもちました。どんどん活動の内容を知っていくうちに、「自分もやってみよう！」と思い、かみの毛をのばし始めました。ヘアドネーションには三十一センチ以上のかみの毛がひつようです。シャンプーや手入れなど大へんなことも多かったけれど、だれかのために役立つんだと思いがらかみをのばし続けました。

かみをきふすると、きふした人にカードがもらえます。そのカードを見て、どんなふうにも人の役に立っているか自分には見えなくて分からないけど、自分のきふしたかみの毛でだれかが笑顔になっていてくれたらうれしいなと思いました。だから、ヘアドネーションをしてよかったなと感じています。かみの毛がないなど、見た目ではんだんして悪口を言うのは相手の気もちを考えていない行動です。この世の中には、見た目ではんだんするさべつがたくさんあると思います。

そこでわたしは「さべつをなくしたい。」と思いました。そのためには何ができるのだろう・・・と考えてみました。

ヘアドネーションをする時に、自分のかみをひつようとしてくれる相手の立場になってみました。自分だったらどうだろうと思うことで自分の言葉や行動が相手をきずつけていられないかわかるはず。もし自分の近くにさべつをしている人がいたらとめたいです。人が見た目ではんだんされず、笑顔で過ごせる日がくるといいなと思います。

あつくなってきたるとよく見る「車内ほうち」のニュース。小さい子が車の中におきざりにされたままなくなってしまう事だとお母さんに聞きました。ちょっとでも動いたらあついののに、まども開いていないとまったくあついだろうな。かわいそうだし、とじこめられている間、どんな気持ちになっていくんだろう。自分だったら力ギの開け方を知っているから外に出ると思う。でも小さい子は力ギの開け方も知らないし、自分では外に出ることもできない。まどをたいたたり、あばれたり、ないていたりするのかな。一人ではどうする事も出来ない。だれかの力をかりないと出来ない。それが私の場合、お父さんやお母さんだったりします。

このニュースを知って自分一人では出来ない事は何だろうと考えてみました。ごはん、せんたく、高い所にあるものをとるとき、おふとんをしくとかいっぱいありました。自分が考えた事よりもっとほかにもあるのだと思います。

私の家に三か月前に新しい家族がふえました。レオンくんというウサギちゃんです。レオンくんをおうちにむかえる時にお父さんとお母さんとよくそくした事があります。それはちゃんと自分たちでお世話をする事です。ごはん、トイレのそうじ、遊んであげる。毎日お世話をしてみたいと思う事が多いけど、しゃべる事が出来ないから、どうしてほしいのか分からない事も多いです。それに遊びにむ中になっていく時に、「ごはんをあげてね。」「トイレのそうじをしてね。」って言われると、たまに、めんどくさいと思ってしまうときがあります。さいしょのころにくらべてお世話の仕方もぎつになっていくし、遊ぶ時間も短くなってしまっています。自分がしなくてもだれかがやってくれるかもしれないと思うときもあります。そのときによく自分がそうやってされたらどう思うのと聞かれたので考えてみたら、自分がそう思われたいやだし毎日ごはんを食べたりせんたくをしてもらっているのが当たり前になっていく事に気づきました。

それから、レオンくんが今どんな気持ちになっているのか考えながらお世話をしています。今まで以上にいていねいにそうじしたり、ごはんをあげたときに、「おいしい?」と声をかけたりしています。そうするとレオンくんもとってもうれしそうです。人も動物も一つしかないいのち。一つ一つ大切ないのち。相手の気持ちになって、どんないのちも私は大切にしていきたいです。

わたしは、よく友達とけんかをします。おたがいによけいなことを言ってしまう、つまらないことでけんかになります。そのときは、おたがいに、「ごめんね。」が言えず、次の日になっても話すこともなく、友達なのにさけてすごしていました。とてもモヤモヤした気持ちでした。

でもだんだんと「これじゃダメだ。」ということが分かってきました。それからわたしは、けんかをしたらすぐに、「ごめんね。」と言うようにしました。そうするとすぐに仲直りできたし、お互いが笑顔になりわたしの気持ちもすっきりするということが分かりました。

わたしは、けんかをする、いやな気持ちになるけど、けんかがダメだとは思いません。おたがいに言いたいことをがまんすると、かえってよくないと思います。また、ストレスもたまると思います。だから、ちようどいいくらい、ほどよいけんかがいいと思います。

でも、もしけんかをしてしまったら、わたしはすぐに自分から、「ごめんね。」と言おうと思います。気持ちがモヤモヤしたままねむれない夜を過ごしたくありません。

前に友達とけんかをしたとき、「けんかをしたときは、先にあやまった方が勝ちなんだよ。」とお母さんが言っていたことを思い出しました。それまでわたしは、あやまったら負けだと思っていたので、ハッとさせられました。

今までのわたしは、すなおにあやまることができているけど、それからは自分が悪いと思ったときは、自分からあやまるようにしました。自分は悪気なく言った言葉でも、相手の受け取り方によっては、いやな気持ちにさせてしまうことがあります。言葉ってむずかしいなと思います。でも、どんなときも、相手のことを考えてやさしい気持ちを持っていると、かならず伝わると思います。そんな気持ちを持ちながら、毎日を送りたいこうと思います。

八月二日午後三時ごろ、ぼくは宿題をしていました。すると、「ドッカーン！」という大きな音がしました。ぼくは「何ごとだ！」とびっくりしました。あわてて家の前の道に出ました。そこには、大きなトラックと乗用車が衝突していました。「これは、大変だ！助けを呼ばなくちゃ。」と思い、ぼくは家に戻って110番に電話をかけました。そのとき、ぼくの手はふるえて、心はドキドキしていました。でも勇気を出して事故のことを伝えました。

けいさつや救急車がくるまで、ぼくはおばあちゃんと一緒に乗用車の助手席にいたお姉さんを道路沿いで看護していました。お姉さんは突然の事故でびっくりして泣いていました。呼吸もはやくなっていました。足も痛いと言っていました。おばあちゃんに「家から水とタオルと氷を持ってきて。」と言われ家に取りに行きました。

家からタオルなどを持って戻るとお姉さんは、しんどそうに「はあはあ。」と呼吸をしていたので、「大きく息をすって、ゆっくりはいてね。」とおばあちゃんとはげましながら救急車を待っていました。その後、お姉さんは病院に運ばれました。

三時間後、お姉さんがお礼を言いに来てくれました。大きなけががなくてよかったなと思いました。お姉さんから、「助けてくれて、本当にありがとうございます。」と言われ、ぼくはとてもうれしい気持ちになりました。

お姉さんを助けてあげられてよかったなと思いました。そして、もっとたくさんの人を助けてあげようと思いました。このとき、ぼくは自分が困っていた時に優しく親切にしてもらおうと嬉しいけれど、自分が困っている人を助けることができたときも嬉しい気持ちになるということが分かりました。

助けられても助けても、うれしい気持ちになります。これが「助け合う」ということなのだと思えます。ぼくは思います。困っている人がいたら、まずは一言声をかけてあげることが大切です。勇気をもって行動することが人を助けることだと思います。

今は以前とは大きくちがう生活になってしまいました。他学年の子たちとふれあえる状態ではなく、まして同学年の子とさえもなんて集まることが困難です。もう元の生活にはもどれないのではないかと、そしてこの生活が一生続くのではないかと、自分も感染したらどうしよう、そんな不安さえおぼえます。ずっとマスクをつけて生活をしているので、お互いの表情が分からないし、何を考えているのか気持ちも分かりにくいです。

私は六年生になり、かわい一年生の入学式に参加しました。一年生は初めきんちょうしてあまり話してくれなかったけど、体力テストなどの交流で最後に手をふってくれて、すごくかわいらしかったです。

一年生の一学期は学校生活に何とか慣れようとする大切な時期です。そんな時期に一年生に充実感を味わってもらうにはどうすればいいかと考えました。

そこで私たちのクラスは交流会をすることにしました。一年生が分かりやすいようにルールを作り、楽しみやすいような遊びにしました。みんなが真剣に創りあげた企画で楽しそうに遊んでくれたことが何よりうれしかったです。マスクで顔を見ることはできなかつたけど、マスクをしても分かるような満面の笑みが見えました。大変な時期でも楽しんで学校に来てほしいな、と改めて感じました。そして一年生以外の子とも、ふれ合いたいと思いました。

このようなコロナ禍でも気持ちがあふれ合える方法をみんなで考えていくことが、とても大切です。今はいろいろな制限があるけれど、みんなの知恵を出し合えば、できることがきつとあると思います。

小学校もあと半年と少しとなりました。その残りを密はさけても、心だけはぎゅっと密な状態で過ごしていきたいです。

今とても流行している、新型コロナウイルスでたくさんの人の命が奪われました。コロナはとても怖いと私は思いました。しかし、怖いと思った理由はこれだけではありません。もう一つの理由、それは、コロナで「自殺」をする人が今増えているということです。自殺の理由、それは「コロナ差別」です。具体的にどんな差別かというと「ある施設でクラスターが発生している」などの根拠のないうわさが、SNS等で事実のように拡散されたり、親の職場で感染者が出たという理由だけで、子供の保育園等の利用を拒否されたりしていることです。

私は今こんなことが問題となっていると知って「人を恐れるのではなく、ウイルスを恐れるべきなのは。」と思いました。また、今コロナによって苦しめられている人を、他の人が苦しめるのはおかしいと思うし、今は人々が助け合い協力し合うべきだと思います。

コロナはみんな怖いけど、だからと言って感染者、感染者の家族、友達、職場の人をせめてもコロナは収まらないし、亡くなった方々、感染者は助かることはありません。だからこそ今は、一人一人が助け合い、少しでも早くコロナを終わらせる。それが今、私たちにできることなのではないかと考えました。

正直私も、感染者が近くにいたら「嫌だな。」「怖いな。」とってしまうかもしれません。私もコロナが怖いし、なりたくないです。でもその怖いコロナで誰かが困っていたり苦しんだりしているのなら、私はその人々を助けたいし、少しでも力になりたいと思います。

今コロナへの正しい理解を求める運動が行われています。具体的には「シトラスリボンプロジェクト」です。新型コロナウイルスの感染者や治療にあたる医療従事者の方々への差別や偏見をなくそうとする思いを共有する人々が同じリボンを身に着けるという運動です。シトラスは柑橘類の意味で、リボンは黄緑色をシンボルカラーにしているそうです。地域、家庭、職場や学校を表す三つの輪できていて、感染した人や医療スタッフがそれぞれの居場所に安心して戻れることや、思いやりや感謝の気持ちが輪の中で広がることを願い、行われている運動です。これは兵庫県でも行われています。ぜひ参加してみてください。

このように、コロナへの正しい理解を求めて多くの人々が協力しています。私もコロナウイルスへの正しい理解をして、少しでもコロナで苦しむ人を助けられるようにしたいと思います。「その人は悪くない」コロナになってもならなくても、みんな同じ人間なんだから、どんな人でも助けたいと私は思います。

僕は、この前ニュースで男の人が男の人を好きになってる人の話を見ました。このことを「同性愛」と言うそうです。僕は、最初それを聞いて、同じ性別どうしでどのような感じなのか想像があまりできませんでした。

でも、そのニュースでの話を聞いていると男の人が女の人を好きになるような感覚と同じなのかなと思いました。

その人からは、「素の自分でいたい」というような言葉があつて、これを聞いて、僕は男の人と女の人が一緒にいることが当たり前だと思っていたけど、これは僕の偏見だなと思いました。そういう偏見を無くしていく事が、同性愛などで悩んでいる人が素の自分を出せて、そして、その人達が輝けることにつながるのかなと思います。

今年の夏に行われ、世界中が盛り上がった東京オリンピックにも同性愛の男子・水泳の飛び込み選手がいました。その選手は、見事金メダルを獲得しました。その選手が、「ゲイの男性で五輪金メダリストだと言えることに大きな誇りを感じる。」

というのを記事で見て、自分の事をすごく出して他の同じ事で悩んでいる人に向けて呼びかけているような感じがしました。僕は、同性愛などで悩んでいる人が悩まないようにするには、その人以外の周りの人達がすごく大事だと思います。その人達を「普通じゃない」「おかしい」などと思つて、そういう目で見て、一歩引いてしまうと、その人は素を出せなくなつてしまいます。

だから、同性愛で悩んでいる人が変わるのではなく、周りが変わっていく必要があると思います。これは、いじめなどの他のことにも言えることだと思えます。みんながそういう意識をもつことが、いろいろな問題解決に向けた一歩になります。僕ら周りで見ている人達が変わつていって、悩んでいる人達が素の自分を出して輝ける場所がたくさん出てきたらいいなと思います。

皆さんは、誰かの言葉によって傷ついたことはありませんか。また、勇気づけられたことはありますか。私は、今まで言葉によって傷ついたり、勇気づけられたりしてきました。そして、言葉は簡単に誰かの人生に影響を与えてしまうので、大切に慎重に使わなければならないと思うようになりました。

きっかけは、中学校の部活動で私が部長になったことです。私は、みんなを引っ張っていくような性格ではなく、技術面でも優れているわけでもなかったのですが、不安が大きかったのです。せっかくの機会でしたが、正直うれいとは思っていませんでした。そんなとき、友達は私にこう言いました。「ええなー、人生楽しそう。」きつと友達からすると、ほめてくれたのかもしれない。しかし私には悲しい言葉でした。なぜなら、私は部長という重圧に苦しんでいたし、これまでも勉強や部活動に自分なりに向き合ってきました。決して楽しいだけではなかったです。そんななか、友達のこの言葉を私は「楽しそう」という意味で捉えてしまい、「努力は認められていないんだ」と思うとすごく辛かったのです。

その一方で、私にはずっと心に残っている言葉があります。それは小学生のときの担任の先生に言われた言葉です。「あなたならできる。」自信がなく何でもネガティブになりやすかった私の背中を押してくれた大切な言葉です。今もネガティブな思考になり、不安で心が押しつぶされそうになることもあります。そんなときは自然とこの言葉を思い出します。先生にとって私は数多くの生徒の一人で、何気ない言葉だったのかもしれない。しかし、私にとってはこの言葉は、そのときだけでなく中学生になった今も心の支えになっています。これから先、自信をなくしたときも、きつとまた私を支えてくれるだろうと思います。

何気ない言葉によって私は、傷ついたり、勇気づけられたりしてきました。そこでふと考えました。逆に私が誰かを傷つけてしまったら勇気づけたりしているのだろうか。

改めて考えると思いつくことはないけれど、私が友達の言葉でつらくなったように、ほめているつもりでも相手にとってはうれしくない言葉をかけてしまっている可能性があります。よく一緒にいる人でも、その人は私のことを全て知っているわけではなく、私も相手の全てを理解しているわけではありません。私の言葉が誰かにとっては何れしくない言葉だったかもしれない。しかし、同じように考えれば、何気ない私の言葉が誰かを勇気づけているかもしれない。実感したことはありませんが、誰か一人でも私の言葉で前向きな気持ちになってくれたらうれしいと思いました。

このように、言葉は簡単に誰かの人生に影響を与えています。だからこそ、言葉は大切にしなければならぬと思います。どれだけ親しくても、どれだけ同じ時間を過ごしていても、その人の全てを知っているとは限らないということを忘れず、自分の発する言葉によって相手を傷つけてはいないか、よく考えて言葉を使うようにしていきたいです。

僕の近所には、外国から来られた親子が住んでいます。以前、母が地域の役員をしていたとき、交流する機会があり、多くのことを感じました。

ある日、母のもとに電話があり、「地域の回覧板が回ってこないのですが、どこかで止まっていませんか。」という内容でした。役員だった母はあちこちに電話をして回覧板の行方を探していました。すると回覧板が外国人の親子の家で止まっていることに気づいたので。母と一緒に家を訪ねてみると、「回覧板が回ってきたのですが、これをどうしたらよいかわからなくて困っています。日本語が難しく書いてあることが読めないのです。」と英語交じりのカタコトの日本語で、申し訳なさそうに話されていました。母はゆっくり回覧板の内容を説明し、「こちらこそ心配りが足りなくてごめんなさい。」と謝っていました。帰りに「もう日本に長くおられて、日本語がわかると聞いていて、ついつい当たり前のように回覧板を回してしまっただわ。いつも困っている人がいないか心配りをしないとだめだった。」と僕に話していました。

今回は災害などのように、命に関わるような回覧ではなかったけど、もしこれが、もっと大切な情報で、外国人の方々が残されてしまったらどうなるだろうと思っただけで少し心配になりました。

その後、母は連絡事項がある度に、ほかの役員の方と協力して、そのお宅に出向き、ゆっくりと説明していました。とてもいい方で、みんなとすぐに打ち解け、楽しそうに会話をしておられました。

その秋の運動会では、保護者の競技のメンバーにも立候補され、地域の輪に入り活躍されました。夏祭りで、その方にあつたとき、僕は勇気を出して話しかけてみました。「日本は楽しいですか。」すると、「日本の人はみんな親切。お祭りも楽しいし、日本が大好きです。」と返ってきました。僕はうれしかったです。

国は違うけど、そんなことは関係ないなと思いました。お互いがお互いの立場に立って物事を考え、思いやりをもって接すると、すぐに心が通じ合います。この交流を通して学んだことを生かして、僕にできることはないか、周りへの心配りを大切にしたいです。

世界には約十五%、人数にすると約十億人もの人が何らかの障がいを持って生まれてきます。

さて、皆さんは障がい者の方を見かけた時どのようなことを感じますか。またどのような接し方、行動をしますか。感じ方、行動などは人それぞれだと思います。しかし、心のどこかで「かわいそう」と思っている人が多いのではないのでしょうか。私もそう感じていました。ですが、よく考えてみると、障がい者と健常者はどこに差があり、どうして少し離れた存在として見てしまうのかと疑問に思いました。

そもそも障がい者とはどのような人のことを言うのか。調べてみると「身体障がい、知的障がい、精神障がいがあり、社会との関わり方によって生活や仕事に制限を受ける人」とされています。特に身体障がいは、見た目でわかるものもあります。私たちが障がい者と判断する基準に「外見」があります。しかしこの外見の違いはあっても、何一つ私たちと差はないのです。ですが今、障がい者を差別する人がおり、新聞などでも一つの問題としてよく取り上げられています。このような問題をなくすために私たちにできることはたくさんあるはず。例えば障がいについて積極的に調べる、障がい者の方の話を聞き理解を深めるなど、このような小さな積み重ねが差別をなくすための大きな一歩につながるのではないのでしょうか。

ところで、「障がい者」という文字を皆さんはどのように書きますか。おそらく多くの人が全て漢字で書くのではないのでしょうか。もちろんそれも間違いではありませんが、インターネットなどの文章を見ると半分くらいのサイトが「がい」を漢字で表記するのではなく、平仮名で表記しています。一見なんてことないように見えますが、この表記の違いには、障がい者の方を「害」から感じる「そこなった」「わざわざい」などというイメージをなくすための配慮によって生まれた、障がい者を思う気持ちの表れだと感じました。

さて、ここまででは日本での障がい者に対する問題、取り組みなどについて考えてきました。そこで、私は「海外での障がい者に対する取り組みはどのようなものがあるだろうか」と疑問に思いました。調べてみると日本と海外では障がい者に対する考え方が大きく違っていました。その中でも私が最も驚いたこと、それは「海外での障がい者は弱者ではない」という考え方です。日本では障がい者は「社会的弱者」というふうに加え、みんなで支えて平等な社会を作ろうというのが一般的な取り組みにつながっています。海外では、「弱者」と考える人はゼロに等しく、障がい者も健常者も平等に扱われています。この考え方によって、日本では実現していない様々なことが海外ではすでに当たり前となっています。この考え方によって、日本でも例として挙げると「特別支援学級が少ない」「障がいを持つ人と考えるのではなく障がい者に挑戦する人」というように考えるなど、他にもいろいろあります。

このような取り組みによって海外では障がい者も健常者と何一つ変わらない生活を送ることが可能になりつつあります。日本では社会の制度が進んだり、障がい者の権利の保障の動きがあったりしますが、まだまだ障がい者に対する偏見は抜けていません。だからこそ皆で力を合わせて障がい者の方々がもっと暮らしやすい町づくりなどをしていくべきだと思います。皆さんも一度、障がいについて考えてみてください。

「オギャー！オギャー！」新しい命が誕生したと共に、新米ママも誕生した瞬間を少し前に身近で感じた。身近というのは私の姉なのですが、出産に至るまでいろいろな苦勞も見てきました。ただお腹が大きくなるだけでなく、つわりやお腹の張りなどいつだって危険しかない生活だったと思います。ましてやこのコロナ禍での妊娠・出産なんて不安でしかない未来だったことでしょう。姉の場合、妊娠したのはコロナが流行し出したときだったので、出産のときはピークになっていました。

私が見てきた姉の姿や話から感じたことがいろいろあります。「妊娠」ということに対して、社会で快く受け入れてもらえないところがあまり無い現実、職を失う現実、妊娠しても普通に働かなければならない現実。どれも聞いていて将来がとても不安になりました。勿論、私も他の親戚も姉の妊娠報告を聞いた時には、涙を浮かべるほど喜びました。「ずっと欲しかった子どもをやっと授かった！」と、笑顔で報告してくれたのです。誰が不快になどなるのかと今でも思います。姉いわく、報告のときでさえ会社はいい顔をしなかったと話していました。面接時に妊娠に対しての質問もはっきりと答えて採用されたにも関わらず、育休切りという始末です。

今の生活や未来の為に、労働者はみな一生懸命働いているのに、その分の見返りが社会から無いのが実態であるかと思っています。さらに妊娠した後での労働となれば、その決して良くはない環境の中、妊娠ではない状況と何ら変わらさず働かなければいけない辛さ。これは少子高齢化を止めたいのであれば、姉の様にならないように会社だけでなく、社会も政府も目を向けるべきだと私は思います。しかし、人によってはつわりなどが全くなく、とても元氣な妊婦さんもいらっしゃることには知っています。その方達からのマタハラも精神的にきつかったと聞きました。ただでさえ妊娠は女性だけがする、命がかかっている経験なのに、どうして男性だけでなく女性からも妊婦に対してマタハラが絶えないのでしょうか。私にとっても数年前のことかもしれないので、とても心配になりました。ですが悪い反面、やはり赤ちゃんの成長が励みで毎日を過ごし、無事出産をして育児をこなすのは並大抵のことではないと思うので、私もしっかりと将来を見据えることのできる女性と出逢いたいです。その為には、残り少ない高校生活でできる勉強に励みたいと思います。

今姪っ子は感情表現も豊かになり、一人で立って歩けるようになっていきます。とてもおじさんとしては嬉しいです。最近では兵庫県でもまたコロナの感染者が増えてきています。その感染者のニュースで妊婦さんが病院に入ることができずに自宅で出産して、赤ちゃんが亡くなっているという報道を見て、凄く悲しくなりました。今の世の中は、やはり大変なことになっていくんだと改めて理解しました。私は高校三年生ですから、ある程度は一人でも大丈夫ですが、小学生以下の子ども達には、大人の助けが必要なんだと改めて思いました。